

全国農業協同組合中央会会長賞(作文1部)

「ぼくのお家のおいわいごはん」

藤島町立藤島小学校三年 庄司 光

ぼくの家では、家ぞくのたん生日にはかならずケーキと、生まれた人のきせつのおいしいごはんかその人の大好きなごはんでおいわいをすることになっています。

四月生まれの宇兄さんのときはもうそうのたきこみごはんです。

五月のお父さんのたん生日には、お父さんのお兄さんが山でとってきた月山だけのごはんです。

七月のお母さんのたん生日にはお母さんが大好きなあずきのたくさんはいったおせきはんです。

八月のおばあちゃんのたん生日には、おばあちゃんが

畑でつくったおいしくてきれいな緑色のえだ豆ごはんです。

九月のぼくのたん生日には宇兄さんが生まれた時にうえたうらにわのくりの木からおちたたくさんのかくりをみんなでひろってそれをすこしほして、おいしいおいしいくりごはんになります。

十二月の観兄さんのたん生日には、クリスマスもちかいのでかならず、観兄さんの大好きなおすしです。

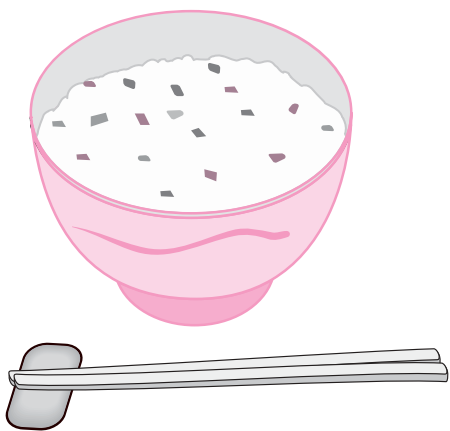
ときどき、おいなりさんとかのりまきずしとかもです。そして、たん生日には、かならずおじいちゃんやひいおばあちゃんのおいしいうまいごはんをたくさんあげておいわいをしてもらいます。

たん生日に食べるおいわいごはんがとてもおいしいのは、ふじ島のお米をつかっておばあちゃんやおかあさん

が心をこめて手作りをしてくれて、おいわいごはんの中  
に入れるざいりょうもこのへんでとれたり作られた物を  
つかっているからだと思います。

そして家ぞくみんなで楽しくおいわいするからです。

ぼくは、おいわいごはんが大好きです。



## 全国農業協同組合中央会会長賞(作文3部)

# 「みんなの力で米作り」

温海町立温海中学校一年 本間 公章

僕の家で作っている米は、とても美味しいです。その理由は三つあります。一つ目は、田んぼが中山間地であり、生活排水の入らない山水だけを使っていることです。二つ目は、今はコンバインで刈り取った後、すぐに乾燥機に入れることが多い中、今もまだ、杭がけをして自然乾燥していることです。三つ目は、種まきから脱穀まで全て家族みんなで行っていることです。

僕も小さい頃から、田んぼで遊んだり、手伝ったりしてきました。小さい頃は手伝うというよりも、遊んでいたというのが正しいかもしれません。田んぼには、タニシやイナゴ、トンボそれにカマキリなどがいて、これらの生き物と遊びながら、父や母や祖父の働く姿を見ることができました。

田んぼの仕事は、力仕事が多く、そして根気のいる仕

事です。僕は今でもすぐ疲れたり、飽きてしまうのに、父も母も祖父も一生懸命で生き生きと働いています。そんな家族の姿を見てみると、僕も頑張ろうという気持ちがどんどんわいてきます。

中学生になった今年の春、父に「代かきをやってみろ」と言われ、僕はやる気満々で田んぼに出かけました。今まではいたことのない特長という長靴をはき、身支度を整え、いざ耕耘機始動。父に言われた通り、引っ張ってみましたが、エンジンがかかりません。しかし、父がやったら一発でエンジン始動。さすが。気を取り直して次の作業。機械の操作を教わり、いよいよ代かきの始まりです。父を見ているとこれまた簡単そうに見えます。実際僕がやってみると大変でした。曲がるときのタイミングが合わなくて、土手を削ってしまったり、むらになったり、機械に足がついていかなかったり、もうメロメロ状態でした。でも、やっていくうちに、だんだん慣れてきて、何とかできるようになってきました。悪戦苦闘し、やっとのことで代かきが終わりました。仕事を終えた後、父と一緒に飲んだジュースは、とても美味しかったです。そして、ちよっぴり大人になったような誇らしい気持ち

になりました。

中学生になった僕に、代かきをさせてくれたのには理由がありました。父も中学一年生の時に、祖父から初めて代かきを教えてもらったそうです。そんな思い出から、中学一年生になった僕にも、代かきをさせてみようと思ったのだそうです。祖父から父へ、父から僕に代かきのバトンが渡されたんだと思いました。二人分の思いが詰まったバトンを受け取ったかと思うと心がキューンと鳴り、それと同時に熱いものがこみ上げてきました。そして、疲れていたはずの体が自然とシャキッとしました。

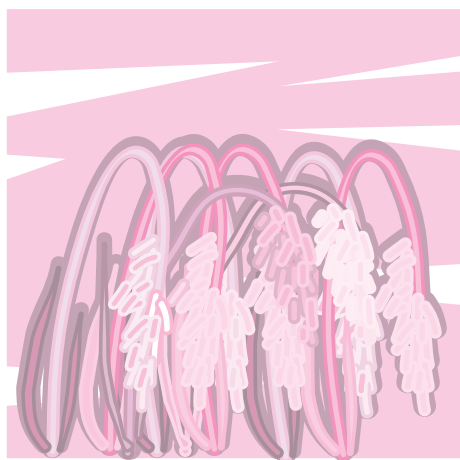
米は八十八の手間暇かけて作られると言いますが、本当にたくさんの労力と時間をかけて作られるものだと思います。こんな大変な仕事は、一人では絶対にできません。漁業をしながら主に祖父が管理しています。父も仕事から帰った後や、休みの日には田んぼの仕事をします。忙しい田植えや稲刈り、脱穀の時などは、家族みんなで力を合わせてやります。時には、親せきの人の応援をもらうこともあります。

今年の春、ちょうど田植えの頃、祖父が病気で入院してしまい、田植えは父が仕事から帰ってから何日もかけ

てやらなければならなかったのですが、親せきのおじさんが手伝ってくれることになりました。父と母は本当に助かったと喜んでいました。そのおじさんは、自分も入院した時に、祖父に助けをもらったことがあったそうです。

米作りは一人では出来ません。家族や親せきの力をかり、助け合い、力を合わせて作られるんだと思いました。今春、家族と親せきみんなで植えた稲はぐんぐんと成長し、穂を出し実りの時を迎えようとしています。

今年の米は、きつと一味違うと思います。



## 山形県知事賞

## 「大すきなごはん」

鶴岡市立朝陽第二小学校二年 今井 大輔

ぼくは、ごはんが大すきです。おばあちゃんが、「おいしいごはんの作り方をおしえてあげるよ。」と言うので、べんきょうすることにしました。

きらきらの「はえぬき」のお米を電気ガマに五合入れて、ごしごしと水でながしました。水を一リットル入れて、スイッチを入れました。二十分すぎると、電気ガマのふたの穴から、ぶくぶくという音とゆげがもくもくとあがりました。三十分たつと、電気ガマのスイッチがきれました。おばあちゃんは、「十分間むすのだよ。」と言ってくれました。ぼくは、十分がまちどおしかったです。かまのふたをあけたら、何とも言えないかおりがしました。かまの中をのぞくと、ピカピカと光って、白いごはんがたけていました。「早く食べたいなあ。」と言ったら、おばあちゃんは、「大輔が、はじめてたいたごはんだか

ら、しんだお母さんにあげてから食べてね。お母さんが生きていたらどんなに喜ぶかなあ。」と言いました。ぼくも、「自分でたいたごはんだよ。」と言ってぶつだんにあげました。お母さんのしゃんが笑っているように見えました。

家ぞくと親せきの人とみんなで食べました。おばあちゃんがやきにくを作ってくれました。ぼくは、ごはんがおいしいくておいしくて五はいも食べました。親せきの子供は、おなかがいっぱいになって、ズボンをめぎしました。そして、「おいしかった。」と言って、ごろんとたたみにねころびました。お父さんは、「大輔、家には田んぼもある。米もたくさんあるから、いっぱい食べるよ。」と言いました。おばあちゃんは、「大輔たいたごはんは、つけものがあると何もいらぬい。」と言って二はいも食べました。みんながおいしいと言ってくれて、とてもうれしかったです。

ぼくは、これからごはんをもりもり食べて、サッカーやうんどうをがんばりたいです。

## 山形県農業協同組合中央会会長賞

# 「おむすびはわたしの力」

山形市立桜田小学校三年 水谷ひらり

わたしの家のお米は、はえぬきです。のうやくをへらして作った、とびっきりこつきゅうのお米です。そのお米でおむすびを作ると、ほっぺたがおちそうになるくらいおいしいです。だからわたしは、いつもおやつに、おむすびを三つも食べます。

わたしは二年生のとき、お友だち二人といっしょに、公園でおべんとう会を開きました。みんなでおいしく食べていたなら、一人のお友だちが、

「ひらりちゃん！そのおむすびおいしいそつだね。」  
と言いました。わたしは、

「一口食べてみる？おいしいよ。」  
と言つと、もう一人のお友だちも、

「あたしも一口でいいから食べたいんだけど。」  
と言つたので、

「どつぞどつぞ、食べていいよ。」

と言つてあげました。するといきなり、

「おいしいー！」

「ほんとにおいしいー！」

と言つてくれたので、うれしかったです。

お友だちは、

「ありがとう、ひらりちゃんのおべんとう食べさせてくれて。わたしのしゃけむすび食べてみて。」  
と言つてくれたのでもらいました。

わたしの家では、母が、三合たいても、わたしと父とで、ぜんぶたいらげてしまいます。わたしはちゃん山もり三ばいも食べます。父も、おいしいおいしいと言つて、いつもおべんとうのごはんをたいらげます。わたしは、家のお米を、自まんしたいくらい大好きです。ほんとおいしいんですよ！みなさんにもぜひさしあげたいくらい、わたしのお家のお米はさらにおいしいのですよ。みなさんも、はえぬきをかつてのうやくをへらしてみませんか？



## 山形県知事賞

## 「将来の夢は米作り農家」

米沢市立広幡小学校五年 佐藤 世和

ぼくは、小学五年生です。家が農家なので小さい時からコンバインなどにのせてもらっていました。そして、保育園のころから、米作りの手伝いをするようになりました。だから、ぼくは、いつの間にか、農家をつくという夢をもつようになりました。安くておいしいお米を作っている、いろいろな人に食べてもらいたいと思っています。

ぼくの家は農家で、はえぬき、コシヒカリ、ミルクィクィーンなどの米をつくっています。それを売って生活しています。今は、東京・北海道・千葉などに販売しています。

東京の八百屋さんのホームページにのせてもらって注文をつけつけたり、そば屋さんの店頭においてもらって注文をつけたりして販売します。お米をおくると、

「おいしかったよ。」

と電話がきます。家の人は、その言葉を聞くと、とてもうれしそうです。家の人は、おきやくさんにもっと喜ばれるように、安全でおいしいお米をつくるためがんばっています。

ぼくは、今年も米作りの手伝いをしています。春は、種を塩水につかべてういたのをえらんだり、なえばこを消どく液につけてあらったりします。田植えの時は、いねをはこんだり、田植え機が入らない所に手で植えたりします。夏は、お父さんといっしょに田んぼをまわり、水を止めたり入れたりしています。全部の田んぼを見るので大変です。秋のいねかりの時は、かどかりをして、コンバインに入れます。機械音がうるさいけど、がまんしてがんばります。冬は、農協や米の倉庫につれていってもらいます。ほかには、精米の手伝いもしています。お客さんから注文をもらうと精米をしてふくろにつめておくります。

ぼくがお手伝いをするとき、お父さんは、おこづかいをくれたりアイスをかってくれたりします。でも、仕事をちゃんとしないと、

「まじめにやれ。」

とすぐおこられます。とてもきびしいお父さんだけど、ぼくは、お父さんをそんけいしています。いろいろな工夫をして、お米を作りお客さんにとても気をつかっているからです。

ぼくは、将来はんばいするお米の名前を考えています。その名前は「米太郎」キャッチフレーズは、「はじけるおいしさ、元気のみなもと！」です。なるべく化学肥料を使わず安全でおいしいお米を作っていきたいです。

ぼくは、来年、田んぼを一つ自分の手で育てることになりました。とても不安だけど、自分のうで前がどのくらいか楽しみです。

これからも米作りの手伝いをして、お客さんに喜ばれるようなお米を作っていきたいです。





## 山形県農業協同組合中央会会長賞

## 「水源をさがしに」

最上町立赤倉小学校四年 結城 智裕

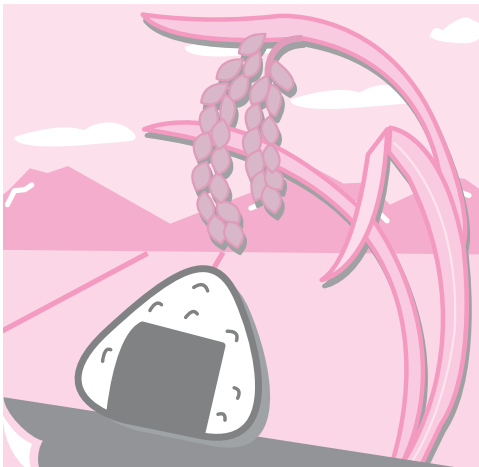
ぼく達、三・四年生は、そう合的な学習で、「赤倉米を育てよう」というテーマを決め、田んぼをかりていねを育てています。米作りは、水稲といわれるように、水がかかせません。でも、ぼく達の田んぼの水が、どこから来ているか分かりませんでした。そこで、八月十日に、水源をさがしに行きました。ぼくは、近い所にあると思っていました。だけど歩いてても歩いてありませんでした。ぼくは、「こんな所に川があったんだ。」と思いました。どんどん歩いていくと道がせまくなってきました。と中に、マンブという穴がありました。この穴は、昔の人が、山をくりぬいてせきにし水が流れるようにしたものです。とてもきれいな水が流れていました。昔は、そこで遊んだそうです。ぼくは、マンブを見るのは、初めてで、とっても大きくてびっくりしました。どんどん歩くと、

植物や虫が多くなっていきました。「こんな所になんて岩があるんだろう」と思っていると、へそ岩とよんでいるといふことを教えてくれました。どうくつがあつて、その中には、一匹のコウモリがいました。やせいのコウモリを見るのは、初めてでびっくりしました。どうくつのわきの道は、歩くはばがメートルありませんでした。そこをぬけると、少しずつ広くなって行きました。川では、つりをしている人もいました。大人の人達は、「もつすこしだからがんばれー。」

と言ってくれました。その声にはげまされました。でもつかれてへとへとでした。道には、穴があいて、ジャンプしてわたらないとだめな道もありました。へびや、トカゲもいました。昔は、こつちの方まで田んぼがあつたと聞いて、「こんな所まで田んぼがあつて歩くのたいへんだなあ。」と思いました。道には、木がたおれていたりしました。ぼくは、山とかに行くのは、「たいへんなんだ。」と思いました。昔の人達は、赤倉地区で田んぼを作るために、こんな所まで、なん回も来てすごいと思いました。やつとこのことで、水源に着きました。みんな、

「つかれた、つかれた。」

と言っていました。思っていたより、水源は、遠かったです。ぼくは、水源を見た時に「ぼく達の田んぼに来ている水は、ここから何キロも流れてくるんだな。こんなに遠くから水を引けるようになってくれた昔の人に感謝しなきゃな。」と思いました。ぼくは、水源に、葉を流したら、ぼく達の田んぼに着くんだろうなとも思いました。昔の人がとてもたいへんな思いをして引いた水を使っているんだから、これからもがんばって世話をし、おいしいお米を作りたいです。



## 山形県知事賞

## 「お米の海」

朝日村立朝日中学校三年 小野寺千賀

私の家では米を作っています。毎年私は、何か手伝います。

今年はず、「そね洗い」をしました。そねというのは、苗を作るために田んぼに並べてナイロンをかぶせて大きくするための大事な土を入れる浅い入れ物です。そねを洗う時は、池にためておいて、一つ一つ手で洗います。それはたくさんあってとても大変です。家には、四百五十枚くらいもあります。私は、それを手伝うのがすごく好きです。ずっとしゃがんで足が痛くなるし、洗っても洗っても減っていく感じがしないけれど、おばあちゃんといっしょに洗っていると、時間がたつのも速いし、どんどん減っていく感じがします。

おばあちゃんといろいろ話しながら手伝います。話の中によく出てくるのが、

「今日の給食はなんだけや？」

という質問です。私はその日のメニューをいい、特に変わりごはんがでてくると、

「ほー、うまさだーじや。」

と、本当に食べたそうにいいいます。そうすると、そね洗いの仕事も楽しくすることが出来ます。

そね洗いの前には、機械でそねの上に水をかけるのも手伝いました。おばあちゃんがだんだんこしや足が痛くなってくると、私がたったりしゃがんだりする仕事を交代してやってあげます。仕事は疲れるけれど、仕事の後に食べるおやつやごはんはいつもの倍、おいしく感じます。

そして夜、炊飯器を開けると、「ジワー」と音がして、真っ白いごはんがツヤを出して輝いています。それは、お米の海という感じです。とてもすんでいます。きらきら輝く海、広がる海が浮かんできます。お米の海を他の人も想像できるでしょうか？

とってもおいしそうでふかふかしているごはんです。その米を私達はいつも食べています。とても幸せだと思います。おばあちゃんやお父さんたちがいっしょけん

めい汗を流して作った米は最高です。

その米を、おばあちゃんは、昼でかける時や山に行く時は、おにぎりとおつけものだけでもっていきます。おにぎりとおつけもの相しょうはとってもいいそうです。おにぎりになると米自体のおいしさを実感できるからでしょう。おつけものがまた自分の家で作ったものだとさらにおいしさがグンと広がります。

ごはんは私達の生活にかかせないものです。ごはんより新鮮で毎日食べてもあきない食べ物はありません。ごはんというのは不思議な食べ物だと思います。何をかけても食べられるし、何を合わせてもおいしいし、お互いを引き立てあいます。

米を使った料理はたくさんあります。カレーライス、オムライス、チャーハン、炒め飯など。どれも家で母や、祖母が作ってくれます。それは最高においしいです。また、自分で作ったものもおいしく感じます。

もうすぐ、稲かりです。稲かりは、大変です。父や祖母、母は、稲かりから帰ってくると、

「あいやー、ちかちかする。」

と言います。だから少しでも早く疲れをとってもらいた

いと思うので、すぐお風呂に入ってもらったり、すぐに横になって休んでもらったりします。

もうすぐふつかふかのおいしい新米が食べられることを思って、みんながんばっています。ずーっと炊飯器の中の「お米の海」を体験できるように、私もおばあちゃんのお手伝いをがんばりたいと思います。



## 山形県農業協同組合中央会会長賞

## 『「ごはん食」を未来へ』

高畠町立第一中学校二年 渡辺真理子

近頃、食の欧米化が進み、「ごはん」を食べる人が減ってきたと言われています。確かにパンもおいしいけど、かといって、ごはんなしの生活なんて想像できますか？身近なことほど分らないとよく言います。そのことで私は、貴重な体験をしました。

それは、小学生の時、モンゴルに行った時のことです。子どもだけの研修で、地平線を前に、広大な野原を馬でかけめぐり、大自然を満喫しました。その時はうらやましいなと思いました。でも、食べ物だけは、最後まで受け入れられませんでした。私の体験したモンゴル食といえば、牛乳を発酵させたもので、日本のチーズの味とはかけ離れたもの。それから羊肉。肉があるならと思いきや、岩塩の特殊なくせのある味が、私の口にはどうしても合いませんでした。ごはんも確かに出ますが、パサパ

サで、甘味もうま味もない米なので、いつも私達が食べているごはんとは、比べ物になりませんでした。だから、私が日本に帰ってきて一番食べたかったのは、当然「ほかほかのごはん」とみそ汁と漬け物でした。夕食に母の作った何気ない普通の食事なのに、私には貴重で、豪華なものに感じられ、何とおいしかったことが。その時の感動は今も忘れることができません。あの日は、母の温かみが伝わってきて、今まで味わったことがないおいしさだったのを覚えています。その時くらい、日本つていな、家庭つていいな、やっぱりごはんつておいしいなと感じたことはありません。

ごはんがおいしいと感じるのは、確かに私が日本に生まれ、米を主食に育ったからでしょう。それなのに、近年同じ日本の若者が「米離れ」の傾向にあることが叫ばれていて、私はとても悲しいことだと思っています。

私は、中学の地理や歴史の時間に、米と私達の関係について、かなり多くのことを学びました。それは、日本や東南アジアの気候が稲作にピッタリなこと。日本の文化は、稲作文化と切り離せないこと。さらに、日本国内の食糧自給率トップは、何ととっても米であること。ま

たそれにもかかわらず、欧米食化のため米の消費量が低下し、貿易摩擦からも減反政策をせざるを得なくなったことなどです。近所の減反の田を見る度、私は暗い気持ちになります。それ以来、私達がこのおいしい「ごはん」を未来へ伝えるにはどうするべきかに関心を持つようになったのです。

さて、皆さんはごはん食とパン食のどちらが日本人の体に合うと思いますか？きつと様々な意見が出るでしょう。現在、日本は世界一の長寿国とされています。私はこのことから、大昔、卑弥呼の時代から食べ続けられてきたごはん食が、健康で長生きする秘訣ではないかと、自分なりに考えています。

少し前の新聞で、「コンビニが米の消費拡大に一役」の記事を、またある時は、「とがずに炊ける無洗米登場」の記事を目にしました。手段はどうあれ忙しい現代には大変便利で、さらに米の消費アップにつながるというのですから一挙両得です。これはごはんを食べる機会をふやすことにもなり、明るい将来が期待できると思います。私は今後、たくさんの若者が、日本の食文化である「ごはん」を見直し、他人事でなく、一人一人が自分たちの

食文化の「ごはん食」を支えていこう、と自覚してくれたらと願っています。

今、私達はこの日本で生まれ、おいしい日本の味の代表である「ごはん」を食べることができると幸せを再認識する時が来ていると思います。私は、モンゴルへ行った時のあの体験から、日本の「お米」のおいしさや必要性、さらに日本の食文化の良さを、強く感じてきました。だから、自信を持って言えます。日本のごはんはおいしいです。私も精一杯応援します。もっと「ごはん食」を見直そうではありませんか。

